

MIRACLE WAVE

南アフリカの波々

コンテストでこんなライディングは当たり前になってきている。決まらなければただのワイドアウト。決まれば一発逆転。勝負の駆け引きには重要なアイテムなのだ。

撮影・キャプション/神尾光輝 Mitsuteru Kamio



これがピア(橋)から見たダーバンの海岸ライン。この時期はサーフィンの他、ビーチサッカー、バレー、スケボー、ミュージックとビッグイベントになって盛り上がるが、常に一貫しない間となる。夜は少くともは用心の注意が必要となるが、基本的にいざ出陣かといことをすすめる。・・・どうしてもという人はタクシーに乗ったまま見よう。



今回、マナーラウンドもクリアした神尾光輝を賞賛していたイスマ。日本人サーファーのレベルもかなり上昇してきているが、一番重要なのはこれから先のラウンドで家に落ち上がること。その危険を知っているのはメディアでもなく、スポンサーでもなくコンペティター本人だ。

牛越峰統、小川直久、田中英義、そして田中樹たちが向かった南アフリカ。コンテストという目的があったが、その延長上に素晴らしい波との出会いがあった。広大な大自然の宝庫アフリカ大陸の最南端に位置し、その沿岸に打ち寄せる極上の波にクルーたちのモチベーションは大きく引き上げられた。



MIRACLE WAVES

南アフリカの波々



みなさん、スタイルの好みなどありますが、これが世界ナンバーワンのサーフィンの一コマです。今回遠く、WCT選手のサーフィンを見て見ることができたけど、やっぱりケリー・スレーターだけ動きが違ってて、・・・光栄なことにかメラマンは超望遠レンズで撮影かく動きが見れるので、その微妙な差が大きな差であることが理解できる。10年以上TOPで居続けるトータルバランスは、サーファーの枠を超えてストイックなアスリートそのものだ。波がバンプした日、真っ暗闇の中、子供のようによろこびながら、一番最後に上がったのはケリー・スレーターだった。

Kelly Slater.



⇒ J-Bay ⇒